

大沼法竜著

心まわられあか
心ん転換

敬行寺發行

因果經和讚

南無や本師の釈迦如来

説法波羅耶にし玉えり

善悪苦楽の其故を

一々知しめたまわんと

今此經を和讚とす

老若男女もろともに

因果の道理弁まえて

現在諸人の有さまは

六根器量のよき人は

五濁悪世に出現し

其時御弟子の阿難尊

未来末世の我等まで

問つこたえつ因果經、

後世の菩提を願う人

唱て我身に引くらべ、

仏道修行を致すべし

皆これ過去の報なり、

忍辱柔和の果報なり

生うまれて醜みにくきそのものは
貧びんぼう乏むく無うま福ふくに生うまるるは
啞おしつんぼう 聾ぼうとなるものは
命いのちも短みじかく子こもなきは
子こ供ども男なん女にょの榮さかえるは
長ちやうめい命めい無む病びやうのその人ひとは
福ふく徳とく円えん満まんなる家いえは
利り根こん發はつ明めいすぐるるは
愚ぐ鈍どんで無む智ちなる其その者ものは
下げ劣れつで人ひとに使つかわるは
業ごう病びやう 惡あく病びやうわすらうは
口こう中ちゆう臭うきく劣つたなきは

腹はらを立たてたる其そのむくい、
慳けん貪どん邪じや見けんの其そのしるし
仏ぶつ法ぽう誇そしつた過とがとかや、
殺せつ生しょうしたる報むくいなり
物ものの命いのちを救すくうゆえ、
慈じ悲ひ心しん深ふかき恵めぐみなり
三さん宝ぼう供こう養やうの善ぜん根こんよ、
念ねん仏ぶつ誦じゆ經きやうの功く徳とくなり
畜ちく生しやう變へん化くわの者ものぞかし、
債おんをきたる報むくいなり
破は戒かいで三さん宝ぼう誇そしる過とが、
惡あく口こう兩りやう舌ぜつ人ひとごとよ

眼病色々やむ人は

下賤で人に愧かくは

高位高官備わるは

五逆十惡造りなば

此経聞てあらためば

此は過去にて現在に

蓮を植れば蓮の華

因果の道理明らかに

只一向に疑わず

仏に燈明おしむ故、

憍慢解怠の心より

礼拝恭敬の其功德、

無間三十六地獄

即菩薩よ仏なり、

種れば未来の種となる

看よ極楽に九品まで、

仏に嘘はなきものぞ

南無阿彌陀仏信すべし。

目次

はしがき	一
1 一度が大事	一八
2 凶面のように	二一
3 慾(名譽)	二四
4 慾(財産)	三〇
5 慾(色慾)	三四
6 慾(食慾)	三八
7 慾(眠慾)	四三
8 慾がなければ	四七
9 怒	五二
10 愚痴	五五

11	因縁果	五八
12	自然の道理	六一
13	何処から来たか	六四
14	波瀾をおこす	六九
15	人間が公害を醸す	七五
16	誰が支配しているか	八〇
17	知識に依じて	九五
18	何故不祥事が重なるか	一〇一
19	こんな教ですよ	一〇九
20	こう考えたらよい	一二九
21	心の持ち方	一三九
22	光明とは	一四七
23	怨を薄くする	一五二
24	施	一六〇

25	和	一六四
26	明朗	一七〇
27	種蒔	一七九
28	持戒・謹慎・つつしみ	一八四
29	忍辱・忍耐	一九一
30	精進・努力	一九五
31	禪定・反省(一)	二〇二
32	禪定・反省(二)	二〇九
33	智恵・修養(一)	二一六
34	智恵・修養(二)	二二一
35	不苦者有智	二三一

はしがき

「人間万事塞翁が馬」という諺があるが、人間の運命はどうすることもできない。成るようにしかならない、ということです。むかし中国に塞という国があって、その翁が楽天家で何事も気にしない。名馬を持っていたが、それが逃げた。「惜しいことをしました」とお悔みを言うのと、「気にすることは無い」と言っていた。十日あまりすると、十頭ばかり名馬をつれて帰ってきた。近所のものがお喜びを言うと、「強いてのことはない」と言っていた。息子が大喜びをして遠乗りをしていたが、落馬して跛になった。お悔みを言うのと、「たいしたことはない」と言っていた。やがて大戦争が始まったが、跛の息子は戦争に行かなくてすんだ。苦にする心が自業苦で、早く諦めなければ、自分の身心を苦しめるだけだ。苦しんでも悩んでも、還らぬことをならべて泣いているのが愚痴というものだ。「子供が死んだ。代われるものなら、私がか

わってやればよいのに」と泣いているが、代わることができないことを知っているからそう言っているだけだ。代わってやって、どこへ行くのだ。自分には、立派な世界に行けるだけの自信があるのか。他宗では、亡骸に涙をおとすと成仏しないと、迷うとかいっているが、人間の涙で迷うたり、成仏したりは絶対にしない。真宗では「泣け泣け、うんと泣け。親子兄弟となり、一家に住まわしていただいたものが散って行ったのだから、別れを惜しんでうんと泣け。しかし、泣いたとて帰っては来ないのだから、また逢える世界に出してただけるように信仰を求めなさい」と教えるのだ。俺ほど幸福者はないと言った老人に、「長男は戦死したのではないか」「それよ」「それでも仕合わせか」「そうよ、それが一番の幸福よう。あれが無頼の者と喧嘩して毆殺されたのなら、世間に顔出しができないけれども、国家の礎になったと思えば、ありがたいではないか」と言っていましたよ。「若いものが死んで、どれだけ立派になるか、成功するかわからないのに……」と泣きますが、逃げた魚は大きいと

思おもつておもいるのです。出世しゅつせをするおとぼかりは限かぎらない、成功せいこうするおとぼかりは思おもえない、
どんな人物じんぶつにななつて世よを騒さわがせ、親おやを泣なかすか苦くるしめるかわからない。現げんに、世間せけんに
迷めいわく惑わくをさし大騒動おほさわどうで新聞しんぶんを賑にぎわしたために、悶死もんしした親おやもいるではないか。妻つまに先立さきだ
たれた老人ろうじんが、家内かないが生いきていたらとメソメソ泣ないているが、五年ごねんも十年じゅうねんも長患ながわづらいで
看護かんごしなければならぬとすれば、心こころのなかで何回毒殺なんかいどくころしているかわからないのに、
よいことばかり言いつて悔くやんでいるのが人間にんげんなのだ。泣ないて送おくり出だした人間にんげんが、送おく
出だされる順番じゆんばんが眼めの前まえに來きていることは知しらないで、愚痴ぐちをならべているだけだ。

「諸行無常しよぎやうむじやう、是生滅法ぜしやうめつぽう、生滅滅已しやうめつめつじ、寂滅為樂じやくめつゐらく」
というお経きやうの文句もんくを、弘法大師くわふぼうだいしが
「いろはにほへどちりぬるを、わがよたれぞつねならむ、うるのおくやまけふこえ
て、あさきゆめみじゑひもせず」と作つくりかえてくださったのだ。

「いろはにほへどちりぬるを」、花はなの顔容かんばんせう美みしく、妙齡みやうれいの美人びじんでも、無常むじやうの嵐あらしに誘きそ
われて散ちつて行いきますよ。榮枯盛衰えいこせいすい、老らう少不定しやうふじやうは世よの習ならい、生うまれたものは遅おそかれ早はや

かれ、死んでいくのが世の中の定めなのです。自分の財産は減らぬもの、子供は自分より遅く生まれたのだから、遅く死ぬるものと自分が決めて当てにしていたのだから、当てがはずれて落胆するのだ。地球上に誰一人として、永遠に残るものはいないのだ。ミイラのようになって残っていたら、子孫のものは迷惑するのだ。新陳代謝してこそ、進歩も発展もあるのだ。短すぎても、長すぎても困るのだ。早く人世を達観して、つぎの世界に出て行く用意をしなくてはならない。

「わがよたれぞつねならむ」、わが世、人世で誰か永久に生きる者がおりましたようか。常ならむ、常恒不変のものがいましうか、みな刻々変化しているではないか。赤ん坊が、いつまでも赤ん坊であつたら大変だ。財産も、殖えたのだから減るときが来るのだ。ある市で二財閥があつて、税務署が査定に困っていた。Aの息子が、放蕩して清いに叩き上げた。Bの親父が大喜び、「俺は堅い、息子は偉い、俺の家が一番になった」と有頂天になったのも束の間、終戦後農地整理をされ、税金のために土地

を手放さねばならなくなった。Bの親父曰く、「Aの息子は偉い、飲んで食うてみな身に着けたが、俺は飲まず食わずに裸体になった」とさ。この世の黒字は未来は赤字だ、あるときに施しておけ、蒔かぬ種は生えないのだ。なくても施す人は、水を汲み出せば新しい水が湧いて出るが、財産を持ちながら施しを惜しむものは、収入の口を締めているから、その人の財産は左前になりつつあるのだ。人世は変動があるから面白い、働き甲斐があるのだ。人世が「ある」が幸福か「ない」のが幸福かわからない。旧家に嫁入りして威張っていたが、子供はみな都会に出て、ひとり取り残されて手伝いはなし、買手はなし、周囲の草は延び放題。都会の生活にあこがれて出たものの、五、六畳間に五、六人の家族、広すぎる人もおれば、狭すぎる人もいる。有って泣く、無うては泣くのがこの人世。しかし、心の向きを変えたら、有って悦ぶ無うて悦ぶ、広い天地、自由の境地のある宗教の世界があるのだが、「心の転換」「まわれみぎ」をしませんかい。釈尊は「教語開示すれども、信用する者少し、生死休ま

ず、悪道絶えず」と仰せられてあるが、ただ物質の多少、多寡にのみ心を向けて、名利に走っているから苦しむのだ。広い天地に心を向けたら有無同然だ。贅沢して糖尿病になるよりは、葉っぱを食べて健康の方が仕合わせではないか、減らねばよいがと握ったまま死んで、次の世で苦しむよりは、他人を喜ばして人から惜しまれてこの世も未来も安楽の方が仕合わせではないか。

「うるのおくやまけふこえて」、有為とは、為あるということで、動作すれば必ず結果があるということ、無為とは、なすことなし、執着を離れるということ、無為の都とは悟りの世界、有為転変とは執着のある、迷いの世界ということ、人間の身口意の三業といって、三ヶ所から動作をする。身では殺生、偷盗、邪淫、口では妄語、綺語、悪口、両舌、意では慾、怒、愚痴、この十通りの悪業を實行しているから、その結果を招くのである。その執着を離れることは、山を越すより辛い、その「奥山を今日越える」名利を超越することが如何に難しいか。白楽天がウカ禪師に仏教の要義を

尋ねたとき、「諸の悪をなすこと莫れ、衆の善を奉行せよ、自らその意を淨くする」とが、是諸仏の教えである」と答えられたら、「そのくらいのことには、三児も知っている」「三歳の童児これを知るといへども、八十の翁もこれを実行することができない」といわれたそうだが、名利の間に転落するのは易いが、感恩の光の頂上に登ることは至難の業である。他人の成功を羨み、妬み、非難をしているけれども、何の原因によつて成功したか、いかなる善根を励んだ結果があらわれたかを追究して、自ら努力することを忘れて悪に加担して転落してゐるではないか。

向上するのにも下落するのにも、自分の心王の命ずるままに動作をしてゐるのだ。光に向いて感謝で努力するのも自分であり、闇に向いて不平不満を抱き、鎬を削つて報復し合つてゐるのも自分である。姿勢の動くままに影法師は動いてゐる、姿勢は心の命ずるままに動作をしてゐる、心の命ずるままに動作して結果を招いてゐるのだから、自業自得である。病氣をするのも災難に逢うのも、詐欺にかかるとも失敗に終わるの

も、蒔いた種しかあらわれて来ないので。宗教を聞かないから、外に向いて呪うものばかりで、内に向かつて反省する者がいないのだ。因果の法則を開示して教導されても、信用する者がいないのだ。実行する者がなおいないのだ。世の中を正しくごらんなさい、正しくお考えなさい、正しく実行しなさいと、八正道から教育を受けてごらんなさい、善に向いて行動するものは家庭が和楽し、子弟は順調に成功し出世し、結婚、進学思いのままになるのだ。ならないのは、どこに欠陥があるか、祖先の意思に背いているか、因果の法則に反しているかを反省しなければならぬ。悪を悪と知り、善と名のつくものは真似でもよいから励みなさい。「自分の家は狭い。広かったら、講師を招待して布教をしていただければ、祖先が喜ばれるが……」と努力してから立派に建築し、自分も健康になった人が何人もいる。遊んでいても宗教を聞かす、
「いつも家を空けて寺参りができるとはよいご身分じゃ」と嘲笑っていた者が、動けない病氣になって苦しんでいる人が何人もいる。

「あさきゆめみじゑひもせず」、あわい夢も見ますまい、酔いもしますまい、醉生夢死で終わらないようにしよう。何のために人間に生まれてきたか、人生受生の最大目的は何か、人間はアーで産れてンーで死ぬる、阿吽の境。毎日便所に往復しているだけでは、万物の霊長の資格はないのだ。飲んで食うて寝て起きるのなら、ネコでもムカデでもノミでもカでもやってゐるのだ。肉体を可愛がる、衣食住に現を抜かして、永遠に生きる魂の行く先も定まらないで流転を重ねたら、情けないではないか。「天道自然にして犯す者を赦さず、過去の原因を知らんと欲すれば現在の結果を見よ、未来の結果を知らんと欲すれば現在の原因を見よ、みな是自己の影像のみ、深く慎むべし」とあるように、現在を見れば過去と未来は想像がつくのだ。善事を実行しているものに、悪果の報ゆる筈がない。たまにあるとしても、それは過去の悪業の持ち越しがあるからだ。現在を見れば過去の想像はつく、上に王侯貴族があり、賢明長者がある。下に不具貧賤醜愚がいる。誰の支配も受けてはいない、自因自果のあら

われである。過去の闇で描いた動作が、現在の明るみに展開しているだけである。

過去現在未来の三世といえは遠いようであるけれども、昨日も今日も明日も三世であり、出た息は過去、入っている息が現在なら、入ろうとしている息は未来である。現在の延長が未来だから、毎日の起居動作は明日から先の結果を展開する準備をしているのである。何が正確なといつても、因果の法則ほど正確なものはない。一人いても、闇暗でも、自心計は自分の阿頼耶識の蔵のなかに映写しているのが、つぎの刹那から展開して見せてくれているのである。自分が上昇して成功するのも、下向して転落するのも、光に向いて努力するか、闇に向いて墮落するかで「人を呪うこともなければ、世を呪うこともない、みな自業自得である。同じ太陽の下、同じ地球上に住みながら、感謝しているものもおれば、不平をならべているものもある。親の養育を受けて報恩のできないことを反省しているものもおれば、頼みもしないのに、勝手に産んでと呪っているものもある。一枚の紙でも拝んでいるものもおれば、粗末にするも

のもいる。心構えが違えば、態度が違う、動作が違うから結果が違うのである。同じ両手を合わせても、合掌すれば皺と皺とがあうから、皺合わせ、仕合わせになり、背中合わせにすれば節と節とが合うから節合わせ、不仕合わせになる。影法師を追えば追いつききらない、名利を追えば一生涯、足らぬ足らぬで悶えなければならぬ。光に向いて進めば、影法師の名利はついて来る。鹽の水を自分の方に寄せれば、両方から逃げる、先方に突けば、両方から入って来るのが真理だ。

「天は自ら助くるものを助く」というが、自分の運命は自分が開くのだ。正しい教えによつて正しく実行していけば、成功の頂上を極めることができるのだ。「運は寝て待て」ではない、「運は練つて待て」だ。大黒さんの槌は「この槌は宝うち出す槌でなし、のらくら者の頭打つ槌」だ。今日一日が最上の好日だ、一切のご恩を感謝しつつ自分の使命を忠実に果たして行かなければならない。闇に向かうものは滅び、光に進むものは栄えるのが真理だ、一日も早く「心の転換」をする人が、成功して業苦楽の生活ができるのだ。